

# 北っ子 敷島北小学校だより

令和7年1月14日 文責 学校長 増坪広夫

## 新たな気持ちで3学期スタート

3学期がスタートしました。県内ではインフルエンザ患者数が過去最多となり地域によっては学校生活にも大きな影響を与えています。本校では感染拡大による学級閉鎖等の措置をとることもなく通常授業を行うことができました。これもひとえに保護者の皆様のご協力の賜です。今年も昨年以上に豊かな一年となることを心から願っています。本年もよろしくお願いいたします。



## 古い自分を脱ぎ捨て新しく成長する年(巳年)

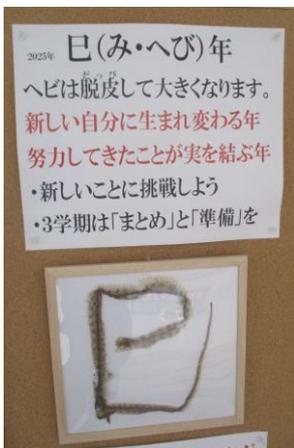
今年の干支は巳年（へび年）です。「へび」と言えば足を持たない長い容姿や毒蛇のイメージからでしょうか「蛇足」「やぶへび」「鬼がでるか蛇がでるか」といったように、あまり良い意味でないたとえに使われることが多いような気がします。しかし、その特性や強い生命力から神様の使いとして大切にされてきた動物で、脱皮を繰り返すことから不老不死のシンボルともされています。

有名なものにはギリシャ神話に登場する医神アスクレピオスが持つ杖「アスクレピオスの杖」がありますが、この「へび」が巻きついた杖は「世界保健機構（WHO）の旗章」にあるように世界的に医療・医術の象徴として用いられています。



日本では古事記や日本書紀における「ヤマタノオロチ」が神話として有名です。頻繁に氾濫する河川をくねくねとした「へび」の長い体にとえ「大蛇が大きなものを丸飲みするようす」から連想されたとされるこの神話は、その「ヤマタノオロチ」（河川）を「ヤマトタケル」が退治（治水）するさまになぞらえた説もあることから「へび」を古くから水神として祀っている地域も多いようです。

始業式の校長の話では「今年は、上手くできなかった自分、よくなかった自分を蛇が脱皮するように脱ぎ捨て、新しい自分に変わり成長する年にしよう」という話をしました。「1年の計は元旦にあり」とはいいますが、新年に思い描いた「〇〇になりたい」といった決意が、すべての子供たちの成長につながることを期待しています。



## 自分の命を自分で守る力をつける

正月1月5日（日）に甲斐市内の小学校1年生の児童が市内を流れる釜無川に転落して死亡する痛ましい事故がありました。冬休み中は保護者の仕事の関係で子供だけで過ごす家庭もあったかと思いますが、あらためて「子どもだけで過ごす時の約束」について、よくよく話し合ってください。「口うるさいなあ」と子供から思われても、ひるむことなく親の考えをいい意味で押しつけて欲しいと思います。命の大切さは何度も繰り返し語っても、決してすり減ってしまうようなものではないはずで、「危険な場所には近寄らない」「困ったらすぐ大人に知らせる」「家を出るときは誰と何処に行くか伝える」「夕方5時までに帰宅する」など、子供たちには「自分の命を自分で守る力」をしっかりと身につけて欲しいです。

# 魔法の言葉×悪魔の言葉

最近、インターネットの掲示板等での常識を越えた誹謗中傷や陰口が横行している感があります。これは他人事ではなく、すべての人が被害者になりえることで恐ろしさを感じることもあります。

学校の中でも注意をしてよく見ておかないと「悪魔の言葉」による嫌がらせは十分起こりえることで、大きな事態にまで発展しかねないとも限りません。

言葉は、両刃の剣です。「ありがとう」「頑張ったね」「助かったよ」「さすが」等の言葉は、誰から言われても、とても幸せな気持ちになり、前向きに頑張ろうとする気持ちになる「魔法の言葉」です。しかし、「本人が気にしていること」「言ってほしくないこと」「嫌味」などの言葉は、言われた本人にとっては大きなショックを受ける「悪魔の言葉」です。言葉は良薬にもなれば毒薬にもなります。



「悪魔の言葉」は言われた人にとっては、ずっと心に残り心を痛め続ける毒薬です。

どこの学校でも、この「悪魔の言葉」を無意識に言う児童もいれば、分かっていて使う児童もいます。周りも気がつかずに見過ごすことや、分かっていても許容してしまうことが起こりがちです。我々大人を含め誰もが「言語感覚を鋭くし、特に悪魔の言葉は絶対に許さないという強い気持ちを持ち、ときには敢然と立ち向かうこと」が昔も今もこれからも求められていると強く感じます。

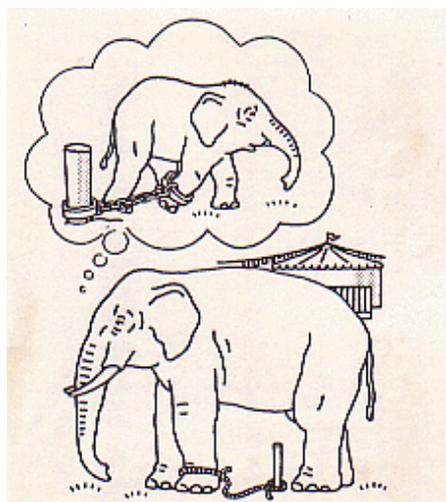
## 言葉の力

朝の旗振りでは「おはようございます」「行ってらっしゃい」といった声かけをしています。ご家庭では「今日の予定は?」「〇時頃に帰るから」といったやりとりだと思いますが、そこには相手を思いやる気持ちが込められているように感じます。「早めに宿題やってね」「計画的に勉強しようね」といった保護者の願いも「どうせ言っても無駄だから」と思わず、きちんと言葉にして伝えたいものです。大人が願いを込めて言葉にすることで、安心や愛情を感じ、健やかに成長する社会が実現するような気がします。

## 「できる」ことを「できない」と思わない

今年の2月から甲斐市のラザウォークでポップサーカスが開催されます。子どもの頃、親に連れて行ってもらったサーカスで間近で見た象の大きさには大変驚かされました。

以前、校長の話でも紹介したのですが、有名な逸話に「サーカスの象」というのがあります。



サーカスの象はロープで杭につながれてじっとしています。杭を引っっこ抜くだけの力を持っているのに、なぜその力を発揮して逃げ去らないのでしょうか。それは…

「自分にはたいした力がない」と思い込んでいるからです。

象は子供のころ、鎖で杭につながれて毎日を過ごします。小さいのでたいした力がなく、杭を引っっこ抜くことができません。象は大きくなってからも、その思い込みにとらわれ続けます。調教師はそれを知っているから、鎖のかわりにロープを使って象を杭につなぎとめます。大きな象にとって杭を引っっこ抜くくらいたやすいはずですが、象は「自分にはたいした力がない」と思い込んでいるから、何もせずにじっとしているのです。

※「自分を磨く方法／著：アレクサンダー・ロックハート」より抜粋